

ハイデッガーのパスカル論

——「黒ノート」に依拠して——

田 鍋 良 臣

はじめに

ハイデッガーとパスカルの思想は近い、としばしば指摘される⁽¹⁾。たしかに『存在と時間』での「頹落」や「死への不安」の分析、同時期の講義での「退屈」論などは、『パンセ』の議論と多くの点で重なる。あるいは科学的な世界観に対する批判的態度や、何よりも、人間存在そのものにこだわり、その深淵に徹底的に迫ろうとする思索の志向性は、両者に共通する実存哲学的な特徴と言える。両者の生きた時代は三世紀近く離れているにも拘らず、思想的な親和性が見られるということは驚くべきことである。おそらくそのことに最初に気づいたのは、ハイデッガーのもとに留学していた当時の三木清であろう。『存在と時間』刊行の二年前に出版された三木の処女作『パスカルにおける人間の研究』（一九二五年）は、「ハイデッガー」という名こそ見られないものの、梶田啓三郎も指摘するように、方法や使用される概念から見て明らかにハイデッガー哲学を下敷きにしたものである⁽²⁾。それゆえ、実存主義

的なパスカル研究の先駆であり、またわが国における本格的なパスカル研究の端緒とも言える三木のこの重要な研究は、ハイデッガーなくして成立しなかったと言っても過言ではない。異国からの留学生がハイデッガーと直に接するなかで、パスカルに通じる点、少なくともパスカル研究に応用可能な思想を察知しえたというこの事実は、ハイデッガーとパスカルの近さを示すだけではない。それはまた、もしかするとハイデッガー自身がすでにパスカルの思想に精通しており、折にふれ学生たちにパスカルについて語っていたかもしれない、という想像をも掻き立ててくれる。

もちろんこのことを裏づける資料は残されていない。ただ、ハイデッガーがパスカルを個人的にどのように見ていたのかを伝える証言ならいくつもある。たとえば、ハイデッガーは仕事机にドストエフスキーのものとともにパスカルの肖像画を飾っていたようである。⁽³⁾あるいは出版社が作成し、ハイデッガーが承認したとされる彼の思想的経歴には、ルター、キルケゴールよりも先にパスカルの名がキリスト教の重要な思想家として記されている。⁽⁴⁾これらを信頼するなら、ハイデッガーはパスカルに対して、少なくとも何かしらの思い入れをもっていたことはたしかであろう。

このように両者の思想的な近さが指摘され、またハイデッガーがパスカルに一目置いていたという証言も存在する以上、ハイデッガーがパスカルを思想家としてはどう評価していたのかが気になるのである。しかしながら管見では、この問題に取り組んだ研究は見当たらない。その最大の要因として、パスカルに関するハイデッガーの言及の少なさが指摘できる。パスカルについての記述は、主著『存在と時間』ではわずかに二カ所だけであり、講演や講義録のなかでもときおり見られるものの、総じて単発的で付随的なもの、あるいは一般的な紹介・評価にとどまっている。⁽⁵⁾そのためこれらから、ハイデッガーがパスカルの思想について実際にどう考えていたのかをうかが

い知することは難しい。ただし例外もある。一九四〇年第二学期講義（以下「一九四〇年講義」と略記）のなかでハイデッガーは、デカルトとの対比において、パスカルの思想的な意義について触れている。これはハイデッガーがパスカルについて公に語った最も充実した箇所だと思われるが、そこでの議論はあくまでデカルトを主眼としており、おそらくそのためであろう、パスカル解釈としてはこれまで特に注目されてこなかった。

しかしながら、二〇一四年三月に刊行が始まったハイデッガーの遺稿「黒ノート」の、とくに一九三八年から一九三九年にかけての記録には、しばしばパスカルに関するまとまった言及が見られる。⁽⁶⁾これらは一九四〇年講義と同じく、主としてデカルトとの関係を軸にしたものであるが、一九四〇年講義が主に哲学的な観点に立ったものであるのに対し、「黒ノート」では一貫してキリスト教信仰が問題となっている。つまり、両者はほぼ同時期になされたパスカル解釈であるにも拘らず、その強調点が異なっているのである。加えて一九四七年頃の「黒ノート」では、これらの哲学的、ないしは宗教的な視点だけでなく、注目すべきことに、パスカルに関するいわゆる「存在史的」な解釈が試みられている。

本論文の目的は、これまで知られていなかったハイデッガーのこうしたパスカル論をできるかぎり詳細に整理し跡づけることで、その多様な解釈の全貌を描き出すことである。そのために本論文はまず、一九四〇年講義でのパスカル論を要約する(一)。つぎにそれと対比する仕方、一九三八年から一九三九年にかけて書かれた「黒ノート」でのパスカル解釈を整理する(二)。そして最後に、これらを踏まえて、ハイデッガーがパスカルの思想に見出した存在史的な意義に光をあてる(三)。本論文を通じて、ハイデッガーの多面的なパスカル論を検討するとともに、刊行されて間もない「黒ノート」研究に寄与したい。

一 一九四〇年講義のパスカル論——デカルトの誤解

一九四〇年講義でのパスカル論は、上述したように、デカルトとの対比において語られている。ハイデッガーが強調するのは、デカルトのコギト・スム（われ思う、われあり）が「主観性の根拠づけ」を担ったことであり、つまり、人間の主観が「基体」として、一切の客観的表象の「基盤」に据えられた、という点である。パスカルへの言及は、近代哲学の端緒となった、デカルトのこうした「偉業」を際立たせるためになされる。

パスカルが他の同時代の〔デカルトに対する〕敵対者たちとともに、コギト・スムについてのデカルトの文章をアウグステイヌスの思想（『三位一体論』第十卷第十章）に関連づけたということがすでに、デカルトの歩みのもつ決定的なもの、つまり主観性の根拠づけが同時代人には認識されていないことを示している。というのも、アウグステイヌスの思索のなかには、そこで働き続けていた古代の思索の伝承とキリスト教信仰という二重のものが、主観性の思想を拒んでゐるからである。（GA48: 215）

ここでは「デカルトに対するいくつかの誤解」（*ibid.*: 214）の代表例としてパスカルが挙げられている。ハイデッガーによれば、パスカルがデカルトのコギトをアウグステイヌスと関連づけて論じること自体、すでに「主観性の根拠づけ」という「決定的なもの」を理解していないことの証左である。デカルト哲学の歴史的な意義は、「古代の思索の伝承とキリスト教信仰」に規定されたアウグステイヌスの思想からは認識できない。要するにコギト・スムが担う主観性の根拠づけとは、過去のいかなる哲学・思想とも比較しえない画期的な試みであり、そのことを見抜

けない以上、パスカルのデカルト批判は、本質的には「誤解」と言わざるをえない。ハイデッガーはデカルトとパスカルの関係を、およそこのように考えている。

ではパスカルによる誤解とは、具体的にはどのようなものだろうか。ハイデッガーは「デカルトは無益で不確実だ」という『パンセ』七八番⁽⁸⁾の有名な文章を引き合いに出しつつ、次のように述べる。

「デカルトは無益だ」、なぜなら彼の形而上学は有益なもの、必要なもの、すなわち魂のキリスト教的な救済に向かわないから。デカルトは「不確実」だ、なぜなら形而上学は人間の洞察に基づいて立てられており、神的な啓示の絶対的真理に基づいていないから。デカルトはここで哲学的、形而上学的には超克されておらず、ただキリスト教信仰から断罪されているにすぎない。(Ibid.)

ハイデッガーの述べていることは明快である。パスカルのデカルト批判は一貫して、キリスト教信仰の立場からなされたものであり、それは「魂のキリスト教的な救済」と「神的な啓示の絶対的真理」の擁護を目的にしている。パスカルのこうした態度は、一般的には近代護教論と呼ばれるものである。近代という時代のなかで理性への信頼が確立されていくにつれ、キリスト教はその信仰の正当性を「理性に反するものではない」という仕方で主張し、証明する必要が出てきた。デカルトよりも三十歳ほど若く、天才的な数学者、物理学者でもあったパスカルは、この要請を自身の使命として受け取った。パスカルの哲学的な位置づけは、このように説明できるだろう。だがハイデッガーは、こうした護教論的なパスカルのデカルト批判のうちに、以下のような「厄介さ」を指摘する。

だがパスカルの立場がその厄介さをもつのは、それがそもそも哲学に対抗してキリスト教的・教會的な信仰の真理をあらためて持ち出すだけでなく、この試みを、思惟するものと延長するものの区別のうちに表現されているデカルトの根本的な立場を、同時にしかした見かけだけ借用することによって、企てているという点においてである(パスカル『パンセ』三四六番以下参照)。(Ibid., 226f.)

パスカルのデカルト批判は、その目的が近代哲学からキリスト教信仰を守ることにあるにも拘らず、「思惟と延長の区別」という他ならぬデカルトの哲学的な枠組みに依拠してなされている。⁹⁾ハイデッガーはここに、パスカル護教論のもつ「厄介さ (Verfängliches)」、つまり、敵対者の支配圏のうちにか「巻き込まれている (in verfangen)」という困難な事態を指摘する。その際ハイデッガーがとくに問題視するのは、パスカルが「思惟」を人間の本質規定とみなしている点である。ハイデッガーは上の引用に続いて、『パンセ』の「思惟は人間の偉大さをつくる」(三四六番)、および「人間はひとくきの葦にすぎない、自然のなかで最も弱いものである。だがそれは考える葦である」(三四七番)という有名な二つの文章を引用したうえで、それらを以下のように解釈する。

パスカルは「思惟」を最高に評価するが、ただそれは、あらゆる思惟が極めてか弱い存在者の偉大な能力にすぎず、したがってますますか弱さに属し、本質的に劣っており、劣位にとどまらねばならない、ということを示すためである。それゆえ次のことが妥当する。「理性の服従と行使、そこに真のキリスト教がある」(『パンセ』二六九番)。(Ibid., 227)

パスカルが「思惟の偉大さ」と言うとき、それは人間を容易に押しつぶすことができる「宇宙の優勢」について人間が自覚していること、より誇張して言えば、「考えることによって、私が宇宙をつつむ」ことを意味する。⁽¹⁰⁾人間はたしかに宇宙から見ればちっぽけな存在かもしれない。だがそのことを「知っている」「考えることができる」という一点において、人間は他のすべての存在者よりも「偉大」であるとパスカルは主張する。けれどもハイデッガーは、パスカルによるこうした思惟の特権的な規定が、むしろ人間の「か弱さ」「劣位」を強調するためのものだと見る。このとき思惟が劣位にとどまるのは、引用の最後の言葉を借りれば、「真のキリスト教」に対してである。ハイデッガーの見るところ、パスカルにとって人間の思惟の偉大さは、キリスト教の神に「服従」し、「行使」されることにこそある。

このようにハイデッガーは、パスカルがデカルトの思惟（コギト）を引き継ぎつつも、それを護教論の立場から批判することで、キリスト教信仰に方向づけたと見ている。他方で、ハイデッガーの見立てでは、その際コギトの哲学的な意義をパスカルは理解していない。パスカルにおいて、「思惟は本質的なものとして認められているが、その本質自身のうちに基体を認識する歩み〔主観性の基礎づけ〕は遂行されていない」(p.11)のである。先ほどの引用で、パスカルがデカルトの根本的な立場を「ただ見かけだけ借用している」と揶揄されたのはそのためである。こうしてハイデッガーは、デカルトとパスカルの関係を次のように総括するにいたる。

「……」デカルトはパスカルが初めから踏み入ろうとしない問題のより根源的な領域を動いている。しかしこれによって、デカルトに対するパスカルの立場の重みが決定される。パスカルの立場は、人間の心情のより豊かな経験に由来し、デカルトが通り過ぎていくわれわれの内なるそうした心情に訴えかけるかもしれない。

「けれども」これらすべては、パスカルが形而上学の本来的な問題領域と決定的な圏域を回避している、というこの「事」を消去しうるものではない。(Ibid, 228)

ハイデッガーはこのように、パスカルよりもデカルトの方が「より根源的」であり、逆にパスカルは「形而上学の本来的で決定的な領域を回避している」と結論づける。結局のところ、パスカルのデカルト批判は、デカルト哲学に対するいわば誤解の産物にすぎず、むしろその表面的な派生態であって、両者はそもそも問題とする次元が異なっている。パスカルに対するこうした評価は、いささか手厳しいものと言えるだろう。だがそれはあくまで、哲学的な評価である。以下では、この点を押さえつつ、「黒ノート」に記された宗教的なパスカル論を見ていくことにする。

二 「黒ノート」のパスカル論——デカルトの補完

冒頭でも述べたように、ハイデッガーがパスカルについて言及する場面は、著作や講演、講義録のなかではほとんど見られない。そのため先に見た一九四〇年講義は例外と言える。それにも拘らず『パンセ』からの引用を中心としたこの講義での議論は、ハイデッガーがパスカルの思想にかなり通じていたことをうかがわせる。それを裏づけるように、この講義の二年前の一九三八年末頃の「黒ノート」〔考察X〕断片六二二には、まさしく「パスカル」という表題のもとで以下の文章が記されている。

「……」パスカルはたんに、デカルトからヘーゲル（そしてニーチェすら！）までの近代形而上学全体がなお

もキリスト教的に規定されているような仕方で、「基体」としての人間、「宇宙」としての世界、万物の根拠と原因としての「神」、「キリスト教的な」思索者であるだけではない。パスカルは一人の信仰者としてキリスト教的である。その信仰能力と信仰要求は、すべての平均的信徒や教会のキリスト教徒をはるかに凌ぐ。そして彼は、このようなキリスト者として、すでに近代的であった当時の西洋的思惟を考えている。偉大な者たちに劣らな形式におこし。(GA95, 343)

ここでハイデッガーはパスカルの特異性について指摘している。ハイデッガーによれば、彼は数学者や物理学者、あるいは哲学者である以前に、何よりも「一人の信仰者」であった。このことは、パスカルをデカルトからヘーゲル、ニーチェに至る著名な近代哲学者たちと区別する。というのも、彼らの哲学にとつてキリスト教は「人間、世界、神」といったいわゆる特殊形而上学の三部門を規定する学的(神学的)な役割をもつにすぎないが、パスカルではこうした哲学的思惟(理性)そのものがキリスト教信仰に向けて服従せしめられるからである。この引用に続いてなされた以下の記述は、この点をより明確にする。

だが彼〔パスカル〕はこの〔近代的な西洋的〕思惟をまた信仰のため、のみ考えている。パスカルはキリスト教の近代護教論の根本形式を作り出した。それは教会によつては長らく依然として十分把握されておらず、利用されてもいない。しかしそうする間に次第にわかってきたようだ。人が予感し始め、また言いうることは、ここには近代の内部で、近代的思惟を手段として、だが同時に近代に対抗して立つ一つの、だが卓抜な可能性がキリスト教に示されている、ということである。すなわち、キリスト教信仰の「真理」を根本尺度とし

て確保し、同時に近代において同行する近代的人間として通用し、そしてすべての近代的な進歩をとらにつくり、利用する「可能性がキリスト教に示されている」。(Ibid.)

ハイデッガーはパスカルを「近代護教論の根本形式を作り出した」者、つまりその実質的な完成者とみなしている。それはパスカルが、キリスト教信仰の保持と近代理性の運用の両立を模索し可能にした、ということにほかならない。⁽¹¹⁾ではこのとき、デカルトに対するパスカルの関係はいかなるものとなるか。ハイデッガーは以下のように続ける。

もちろんパスカルを通じてデカルトは決して超克されていない。だがたしかにデカルトは信仰に適合せしめられ、逆に信仰心は近代的になる。(Ibid., 344)

すでに確認したように、「パスカルはデカルトを超克していない」という同様の評価は、一九四〇年講義でも見られ、そこにパスカルに対するデカルトの哲学的な優位性が指摘されていた。だがここでは、この同じ局面において、むしろキリスト教信仰にとつて積極的な意義が語られている。ハイデッガーは、パスカルによって「デカルト」が、つまりは、近代合理主義的な世界観が「信仰に適合せしめられ」ただけでなく、それによって逆に「信仰心が近代的になる」と言っている。これはどういうことか。この引用からおおよそ一年後の一九三九年頃に記された「黒ノート」〔考察Ⅻ「断片一八」〕のなかで、ハイデッガーは、デカルトのいわゆる「神の存在証明」に触れつつ、この問題にかかわる発言をしている。

だがこの証明〔神の存在証明〕において決定的なことは、そもそも神信仰が、必要とされる有益な何かとして確保されているということだ。パスカルは決してデカルトの反対者ではなく、かえってデカルトの根本的な立場においてすでにともに要求されていた、明らかな補完である。(GA96, 39)

この文章は、「プラグマティズム」が近代合理主義の「不可避的な帰結」であると論じた箇所に記載されている(vgl. *ibid.*, 38f.)。ハイデッガーは、「神の存在証明」を行うデカルトにとって「神信仰」がなおも「必要とされる有益な何か」、つまりプラグマティックな意味で合理的な必然性をもつと指摘し、パスカルがそれを「補完」したと述べている。この指摘は一見、パスカル本人が「私はデカルトを許せない。彼はその全哲学のなかで、できることなら神なしですませたいものだ、きつと思つたことだろう」と述べていることと食い違うように見える。おそらくハイデッガーはパスカルのこの有名な言葉を、デカルト哲学の拒絶ではなく、むしろそこに見られる不備を指摘し、それをパスカル自身の思索の課題として引き受けるものと理解したのである。パスカルがデカルトに見出した不備とは、そこで要求されていたにも拘らず見落とされたもの、すなわち神への信仰心にほかならない。パスカルによれば、神の存在はデカルトのように理性の推論によって証明されるものではなく、あくまで信仰を通じて初めて「直感」されうるものである⁽¹³⁾。それゆえ、パスカルが信仰心というデカルト哲学に欠けていたものを補完するのであれば、デカルトによって基礎づけられた近代的世観はキリスト教信仰に適合するものとなり、逆にキリスト教信仰は近代的になる⁽¹⁴⁾。要するに、「パスカルを通じてキリスト教は近代にふさわしくなる」(GA95, 346)のである。

とはいえパスカルがあくまでデカルトの補完を担う以上、パスカルの信仰もやはり理性が必要とする何か、つま

りは合理的に要請された有益なものと言わざるをえない。けれども、パスカルの信仰する神はどこまでも「イエス・キリストの神」であり、デカルト的な理論の神、いわゆる「哲学者の神」ではない。⁽¹⁵⁾ それではハイデッガーは、パスカルにおいて「理性が信仰を必要とする」という事態をどう捉えているのか。有名な「心情の論理」に触れた「黒ノート」での以下の指摘は、この点に関するハイデッガーの見解を端的に示している。

「心情の論理」は、「主観」としての近代的人間形態にとって本質的な「体験」の肯定を容認し、しかもそれは「数学的なもの」、したがって形而上学的な意味での「技術」の肯定と一つになっており、そして両者をイエス・キリストへの信仰心から、この信仰心のうちで容認している。(Ibid., 344)

パスカルにとって「心情の論理」とは、神の恩寵を感得する「愛の秩序」に属し、通常は数学的・物理学的な「理性の論理」に対置されるものと考えられている。だがハイデッガーはここで、両者を対立するものとは見ていない。むしろ心情の論理が担う「イエス・キリストへの信仰心」のなかで、「数学的なもの」や「技術」といった理性的なものが肯定されると主張する。ここにパスカルにとっても「理性が信仰を必要とする」とされる理由を求めることができるだろう。注目すべきは、この引用のなかで「体験」が近代的な主観にとって本質的とされ、さらにこの体験の肯定を心情の論理が「容認する」と言われている点である。「体験」とは、ハイデッガーによれば、「感情の享受」において同時に「自分を感じる」⁽¹⁶⁾ という人間の特殊なあり方を意味し、このことのうちにすでに「主体」としての人間のあり方、つまりは「主観性」が内包されている (vgl. Ibid., 149)。それゆえ心情の論理がこうした体験を容認し肯定するのであれば、キリスト教信仰のうちで、近代的な主観性、およびそれに依拠した科学技術

的な営為のすべてが統一的に根拠づけられていることになる。要するに、キリスト教信仰のなかで人間の理性と近代的世界観は排除されるどころか、かえって神への信仰という、コギトよりもある意味で一層「絶対確実な基礎」のもとで肯定されるのである。デカルトにおいて、またパスカルにとつても「理性が信仰を必要とする」と言われるのは、この基礎を確保するためであろう。逆に言えば、信仰に基づかないコギトは、依然として不確実なままである。ハイデッガーはここに、理性を信仰へ服従させようとするパスカル護教論の核心を見ている。こうしたハイデッガーのパスカル解釈は、パスカル自身がデカルトを「無益で不確実」と断じ⁽¹⁷⁾、神の恩寵のうちに真の「確実性」を求めていることから⁽¹⁸⁾、一定の正当性をもつように思われる。

三 パスカルの存在史的意義

ここまで見てきたように、「黒ノート」のパスカル論は一九四〇年講義と同じくデカルトとの関係を軸に展開されている。しかしながらパスカルの立場は、一九四〇年講義ではデカルトに対する哲学的な誤解として消極的に語られていたのに対し、「黒ノート」ではデカルトに対する護教論的な補完として積極的な側面が強調されている。こうした両者の違いはしかし対立や矛盾ではなく、事柄を哲学的に見るのか、あるいは宗教的に見るのかという解釈上の視点の違いとして整理することができる。重要なことは、パスカルに対するハイデッガーの見方は決して一面的なものではなく、重層的あるいは複眼的だということである。ではハイデッガー自身の存在の思索にとつて、このように多面的に解釈されたパスカルの思想はいかなる意味をもつのか。本論文は最後にこの問題に取り組み、その重要な手がかりとなる指摘が、「黒ノート」の先ほどの「心情の論理」への言及に続けてなされている。

それゆえパスカルの「秩序」はキリスト教を通じたデカルト主義の最深の救済であり、文化キリスト教を通じて近代のきわめて厄介な肯定であり、そして、そのため、何よりも、近代とその歴史的な諸根柢の超克のあらゆる思索的な敢行を前にした最も決定的な回避である。というのもパスカル主義の史学的な引き受けにおいて、あらゆる思索的な問いに対し長らくなされてきた拒絶が、信仰という精神的な防御の最高の形式の背後に、その最も確かな庇護を求めるからである。(GA95, 344)

「デカルト主義の最深の救済」とは、パスカルを通じて近代的世界観がキリスト教信仰のうちに基礎づけられることを意味する。このことは先ほど確認した。しかしハイデッガーはそこに、「近代のきわめて厄介な肯定」があると言う。「厄介さ」とは、一九四〇年講義でも言われていたように、第一義的には敵対者の支配圏域に「巻き込まれてしまっている」という事態、具体的には、パスカルがデカルト批判を通じて、逆にデカルト主義を補強し、肯定してしまっていることを指す。そしてここにハイデッガーは、「近代とその歴史的な諸根柢の超克の〔……〕最も決定的な回避」を指摘する。この発言は一見、一九四〇年講義で言われていたパスカルの誤解、つまりデカルトに対する哲学的な無理解と重なるように見える。そこでもパスカルは、デカルトの切り開いた「形而上学の本来の関題領域と決定的な圏域を回避している」(GA95, 288)と同様の言い方がされていた。しかしここでの強調点は、パスカルよりもデカルトの方が哲学的に根源的であるということではない。そうではなくハイデッガーは、パスカルの護教論を通じて、「近代とその歴史的な諸根柢の超克」の可能性が決定的に閉ざされてしまったと主張している。この「近代の超克」という試みは、まさしくハイデッガー自身のいわゆる存在史的な思索が担う課題に属するから、この指摘は端的に言って、パスカルが本来的に思索すべきもの、要するに存在の問いを、信仰という「精神的な防

御の最高の形式」でもって、最高度に隠蔽してしまったことを意味する。この記述から八年後の一九四六年頃の「黒ノート」（注釈Ⅲ）でもハイデッガーは、再度「心情の論理」に触れつつ、この点をより率直に語っている。

「心情の論理」。——パスカルがこの名称で思念しているのは、いかなる決定的な領域をも準備することができない困惑と逃げ口上である。そのようにして人は、到来する洪水の氾濫のかたわらに、なお移住しようと試みる。「心情の論理」への回避に「理性の論理」の教義的な引き受けが対応する。まるで「論理」と「理性」、ラチオとテオリーアが天空からどこかに落ちてきたため、盲目的に「卓抜な」真理とみなされなければならないかのような。というのも、いまだに誰もそれらの本質的な由来を少しも問い求めておらず、いわんや経験してもいないのだから。(GA97, 238)

15 (田鍋)

この記述の前後の文章から判断して、ここでの「決定的な領域」とは、もはや形而上学の領域ではなく、むしろ「形而上学の超克」が遂行される領域であり、ハイデッガーはそこに「思索すべきものの到来」、つまり存在の生起を見ている (vgl. *ibid.*: 236, 239f.)。ハイデッガーによれば、パスカルはこうした存在史的な領域を準備することができない。その代りになされるのが、心情の論理へのキリスト教的な「回避」と、それに「対応」した（つまりは依拠した）キリスト教神学における理性の論理の「教義的な引き受け」である。ここに先ほど「最も決定的な回避」と呼ばれた事態を指摘することができるだろう。ハイデッガーにとってパスカルの護教論は、他の近代形而上学と並ぶ、いや信仰という絶対的なものに裏打ちされたという意味ではそれらよりもはるかに強力で、「最も決定的な」存在忘却の歴史的形態なのである。

そうするとパスカルも結局のところ、ハイデッガーの存在史的観点からすれば、プラトンからニーチェに至る西洋哲学・形而上学の存在忘却の歴史のたんなる一齣として片づけられてしまうのだろうか。もしそうだとすれば、本論文の冒頭で触れたパスカルとの思想的な近さや、パスカルへの思い入れを示す証言をどう理解すればよいのか。ハイデッガーのパスカル論を辿ってきたわれわれは、ここで行き止まりにぶつかる。だが上の引用に続いてなされた以下の記述は、ハイデッガーのパスカル論にさらなる奥行きがあることを示している。

だがそれにも拘らず、「論理」の二つのあり方の区別において、ある本質的な痕跡の予感が存しており、その痕跡は、ほとんど見取られることなく、またすでにふたたび見捨てられてもいる。／心情の「論理」——われわれは両者を始源的に考える。すなわち、「心情」とは存在において性起した、存在の静けさの響きの反響である。／「論理」とは「存在」がその本質のうちへ集まる仕方である。ロゴスの事柄は言表や、ロゴスを表象し説明するエピステーメーとすら関係ない。／「心情の論理」、すなわち響きへ聴き入ることに基づく助言の推測の情緒において、存在の反響が集まる仕方。／（これらはすべて性起における気づきからはじめて思索されなければならぬ）。(Ibid., 238 ハンコの「存在」は Seyn)

ここでは明らかに、パスカルの思想のうちに、形而上学ともキリスト教護教論とも異なる思索の積極的な可能性が認められている。ハイデッガーはまず、パスカルが設定した心情の論理と理性の論理の「区別」のうちに、「ある本質的な痕跡の予感」を見る。そして、「理性」と「論理」がともにギリシアの「ロゴス」に由来することを踏まえつつ、「心情の「論理」という言い回しのうちに、この二つの論理をたたみ込む。そのうえで、注目すべきことに、

このように捉えられた心情の論理に関する「始源的」な解釈に着手するのである。この試みには、「性起」や「存在の静けさの響き」、あるいは「集まること」としての「ロゴス」といったこの時期に特有の難解な概念が用いられる。ここではこれらについて論じる余裕はないが、こうした解釈が存在史的な観点からなされていることは間違いない。ハイデッガーはパスカルを単に存在忘却として批判するだけでなく、むしろそこに存在の始源的な次元にまで届きうる思索の可能性をも読み取ろうとしているのである。この時期のハイデッガーが、ヘルダーリン以外の思想家に対して、このような「高い」評価をしている例は珍しい。

だがこの試みは、連続する改行が示唆するように、「痕跡の予感」というきわめて不明瞭なものの手がかりにした困難なものである。おそらくそのためであろう、既刊の「黒ノート」には、この問題に関するこれ以上の言及は見られない。はたしてパスカルに対する存在史的解釈は、これ以後どのような展開を見せるのか。あるいは結局のところうまくいかず、ここで立ち消えになってしまうのか。これらについては、今後の「黒ノート」の刊行をまたなければならぬ。⁽²⁰⁾

むすびにかえて

本論文は、一九四〇年講義と一九三八年以降の「黒ノート」をもとに、従来は知られていなかったハイデッガーのパスカル論を見てきた。両者ともにデカルトとパスカルの関係が軸になっているという点は一致している。だがパスカルの思想は、前者ではデカルトに対する哲学的な誤解と言われたのに対し、後者ではデカルトに対する護教的な補完の側面が重視されていた。ほぼ同時期に語られたこれらのパスカル論は、同じ場面を問題にしているにも拘わらず、それぞれ強調点が異なっている。加えてハイデッガーは、パスカルの近代護教論が存在の問いを決定

的に回避しているとし、自身の依拠する存在史的な立場から批判する。しかしそれと同時に、パスカルの思想のうちに存在の思索にかかわる積極的な意義をも見出していた。ただしそこで語られた「ある本質的な痕跡の予感」については、文字通り「予感」にとどまっており、その内実は現在のところ不明瞭である。以上をまとめるなら、ハイデッガーにとってパスカルの思想は、デカルトの哲学的な誤解であるとともに護教論的な補完であり、そしてまた、存在忘却であると同時に存在の痕跡を予感させるもの、と言えるだろう。こうした解釈の多面性そのものが、ハイデッガーが受けとめたパスカルの思想的な豊かさを物語っている。

最後に付言するなら、本論文で見てきたハイデッガーのパスカル論は、「黒ノート」で展開された思索と信仰、哲学と宗教の関係をめぐる考察に深くかわるものであり、とりわけキリスト教批判の文脈に即してあらためて捉え返されなければならない問題でもある。本論文では詳論できなかったが、これらは「黒ノート」を貫く中心的なテーマの一つと言え、そこにはまた、ハイデッガーの独特な神の問題も含まれる⁽²⁾。本論文で取り組んできたパスカルのめぐるさまざまな論点は、ハイデッガーの知られざるこうしたいわば「宗教・哲学的」な思索の一端とみなすこともできるだろう。この背景に照らした場合、パスカルの思想はどのような意味をもつのか。この点については、今後の研究課題としたい。

〔凡例〕

ハイデッガー全集 (Martin Heidegger, *Gesamtausgabe*, Frankfurt a. M.: V. Klostermann, 1975ff.) からの引用は (略号、頁数) で示した。引用文中における強調および () 内はハイデッガー、傍線と改行を示す／および 「」内の補足は引用者による。略号は以下のとおり。

GA2 *Sein und Zeit*, 1977

- GA5 Holzwege, 1977
 GA8 Was heißt Denken?, 2002
 GA20 Prolegomena zur Geschichte des Zeitbegriffs, 1994, 1. Aufl., 1979
 GA21 Logik. Die Frage nach der Wahrheit, 1976
 GA26 Metaphysische Anfangsgründe der Logik. Im Ausgang von Leibniz, 1990, 1. Aufl., 1978
 GA42 Schelling: Vom Wesen der menschlichen Freiheit (1809), 1988
 GA48 Nietzsche: Der europäische Nihilismus, 1986
 GA61 Phänomenologische Interpretationen zu Aristoteles. Einführung in die phänomenologische Forschung, 1994, 1. Aufl., 1985
 GA95 Überlegungen VII–XI (Schwarze Hefte 1938/39), 2014
 GA96 Überlegungen XII–XIV (Schwarze Hefte 1939–1941), 2014
 GA97 Anmerkungen I–V (Schwarze Hefte 1942–1948), 2015

註

- (1) たとえば、野田又夫『パスカル』岩波新書、一九五三年、一一頁以下、および茂牧人「ルター、パスカル、キルケゴール」形而上学の超克のモチーフ」秋富克哉／安部浩／古荘真敬／森一郎編『続・ハイデガー読本』法政大学出版局、二〇一六年、六四頁以下参照。Vgl. Matthias Jung, *Das Denken des Seins und der Glaube an Gott. Zum Verhältnis von Philosophie und Theologie bei Martin Heidegger*, Würzburg: Königshausen u. Neumann, 1990, S. 182f.
 (2) 梶田啓三郎「解説」三木清『パスカルにおける人間の研究』岩波文庫、一九八〇年、二二〇頁以下参照。
 (3) Vgl. Heinrich Wiegand Petzet, *Auf einen Stern zugehen. Begegnungen und Gespräche mit Martin Heidegger 1929–1976*, Frankfurt a. M.: Societäts-Verlag, 1983, S. 90.
 (4) Vgl. Günter Neske, „Nachwort des Herausgebers“, in *Erinnerung an Martin Heidegger*, Pfullingen: Günter Neske Verlag, 1977, S. 300, 304.
 (5) Vgl. GA2, 5 Anm. 4, 185; GA20, 181, 223; GA21, 77; GA26, 63, 169; GA61, 93 usw.
 (6) 「黒ノート」とは一九三一年秋から一九七〇年代初頭にかけて、ハイデッカーが「黒い表紙」のノートブックに密かに書き

綴っていた思索日記の総称である。現在マールバッハのドイツ文学館に三四冊が保管されており、そのうち一九三一年から一九四一年までの一四冊がまずハイデッガー全集第九四巻、第九五巻、第九六巻として二〇一四年三月にクロスターマン社から刊行された。翌二〇一五年二月には、一九四二年から一九四八年にかけての九冊が全集第九七巻として刊行されているこの「黒ノート」の刊行と同時に、そのなかに記されていたユダヤ人（あるいはユダヤ教）に関する文言がいわゆる「反ユダヤ主義」にあたるものとされ、現在ヨーロッパを中心に物議を醸してゐる（vgl. Peter Trarwy, *Heidegger und der Mythos der jüdischen Weltverschönerung*, Frankfurt a. M.: Vittorio Klostermann, 2014; Peter Trarwy, Andrew J. Mitchell (Hrsg.), *Heidegger, die Juden, noch einmal*, Frankfurt a. M.: V. Klostermann, 2015; Joseph Cohn, Raphael Zagury-Orly (éd.), « Heidegger et « Les Juifs » », in *La Règle du Jeu*, N° 58/59, Paris, 2015）。筆者は「黒ノート」のユダヤ論の背景に、ユダヤキリスト教に対するある種の宗教批判があると見ているが、この問題は本論文では取り組めない。「黒ノート」にはこれ以外にも、従来知られていなかった数多くの論点が記されており、それらを丁寧に概括したものとして以下のヴェイルツの研究が有益である。マルクス・ヴェイルツ、田鍋良臣訳「ハイデッガー「黒ノート」の位置価値」『文明と哲学』第七号、日独文化研究所編、二〇一五年、二〇七―二二三頁。

- (7) パスカルは「幾何学の精神について」のなかで、デカルトのコギトをアウグスティヌスと関連づけている（パスカル、田辺保訳「幾何学の精神について」『パスカル著作集1』教文館、一九八〇年、二二九頁参照）。なおハイデッガーが引用文中で補足しているアウグスティヌスの『三位一体論』第十卷第十章には、「それゆえ、他のことを疑う人も精神のこのすべての働きを疑ってはならない。もし、この精神の働きが存在しないなら、何ものについても疑うことは出来ない」（アウグスティヌス、中沢宣夫訳『三位一体論』東京大学出版会、一九七五年、二八九頁）という文章があり、いわゆる方法的懐疑を通じてデカルトが「発見」したとされるコギト・スムとの類似性を確認できる。
- (8) ハイデッガーは『パンセ』から引用する際、書誌情報を明示していないが、断章番号から判断して、いわゆるブランシユヴィック版を用いていると思われる。なお『存在と時間』でも同版が使用されてゐる（vgl. GA2, 5 Anm. 4）。
- (9) ハイデッガーはまた、人間を「無限と虚無」とごう「二つの深淵」の中間に位置づけたパスカルの「中間者」の思想も、デカルトに由来すると見てゐる（vgl. GA48, 263）。
- (10) パスカル、前田陽一／由木康訳『パンセ』中公文庫、一九七三年、二二五頁以下参照。以下同書からの引用は『パンセ』とし、頁数のみ記す。
- (11) この点に関しては一九三六年夏学期講義での以下指摘も参照。「パスカルのような思想家や人々はもう一度、純粋な思惟

と純粋な信仰の両者を、それぞれその根源性と先鋭さのうちで、同時に一つのものとして、堅持しようとする(54)。(GA42, 54)。

- (12) 『パンセ』、五六頁。
- (13) パスカル、田辺保訳「メモリアル」『パスカル著作集Ⅰ』教文館、一九八〇年、一六〇頁参照。以下同書からの引用は「メモリアル」とし、頁数のみ記す。なお「直感」の原語は *sentiment* である (cf. Blaise Pascal, « Le Memorial », in *Œuvres Complètes III*, Jean Mesnard (éd.), Paris: Desclée de Brouwer, 1991, p. 50)。同様の思想は『パンセ』二七八番にも見られる(『パンセ』、一八七頁参照)。
- (14) キリスト教信仰と近代的世界観とのこうした相互補完関係は、同時期の講演「世界像の時代」(一九三八年)において語られた、近代を特徴づける「世界像のキリスト教化」と「キリスト教精神の近代的世界観化」の背景をなすものと考えられる (vgl. GA5, 76)。
- (15) 『メモリアル』、一六〇頁参照。
- (16) ハイデッガーはこの「自分を感じる」とが、デカルトによって「コギタチオン」と呼ばれた「意識」の本質であるとも指摘している (vgl. GA95, 151)。
- (17) 『パンセ』、五六頁。
- (18) 『メモリアル』、一六〇頁参照。なおハイデッガーはしばしば、デカルトの「確実性としての真理」がキリスト教における啓示真理としての「救済の確実性」に由来すると述べている (vgl. GA5, 107; 244f)。パスカルが、デカルトのコギトよりもさらに確実な真理を神の恩寵に見るかぎり、このことは救済の確実性の近代的な取り返しとして理解することもできるだろう。
- (19) これらの独特な概念については、ハイデッガー、辻村公一／ハルトムート・ブフナー訳『道標 ハイデッガー全集第九卷』創文社、一九八五年の巻末につけられた「訳語解説」、およびハイデッガー、大橋良介／秋富克哉／ハルトムート・ブフナー訳『哲学への寄与論稿(性起から「生起」について)』ハイデッガー全集第六五卷』創文社、二〇〇五年の巻末につけられた「訳語表」での解説を参照にされた。
- (20) この引用文と同時期の講演「詩人は何のために」(一九四六年)でもハイデッガーは、以下のようにパスカルの心情の論理について触れ、理性の論理に対するその積極的な意義を見出している。「デカルトとはほぼ同時期に、パスカルは計算的な理性の論理に対して心情の論理を発見している。心情空間の内的で見えないものは、計算的な表象の内的なものよりも内的で

あり、それゆえ一層見えないだけでなく、同時に、制作可能な諸対象の領域よりも一層遠くに達する。心情という見えない最内奥のものななかで、人間ははじめて愛すべきもの、つまり先祖、死者、幼児期、将来の人々に心を傾ける」(GA5, 306)。さらに一九五二年夏学期講義では「[中高ドイツ語の]「Gedanc」 という始源的に言う語の意味での思索は、パスカルが後の数世紀にすでに数学的思考に抗して取り戻そうと試みた心情のかの思惟よりも、およそ根源的である」(GA8, 143)と指摘されている。この発言は、存在史的なパスカル解釈の展開を見極めるうえで、示唆に富む。

(21) 「黒ノート」における神の問題については、以下の拙論を参照にされたい。田鍋良臣「ハイデッガー「黒ノート」の研究——「考察Ⅱ-VI」を中心に——」『哲學論集』第六二号、大谷大学哲学会編、二〇一六年、一—二〇頁、とくに一四頁以下。

【謝辞】

本研究は科学研究費助成事業「研究活動スタート支援」(15H06724 ハイデッガー「黒ノート」の研究——「計算的思考」の分析を中心に)の助成を受けたものである。

(元大谷大学任期制助教 宗教哲学)

〈キーワード〉キリスト教護教論、デカルト、存在の思索